

古事記の他界観とシャーマニズム

――交渉手段の考察を通して――

Andassova Maral

〔抄録〕

古事記の物語が展開していくなかで「高天原」、「黄泉国」、「葦原中国」、「根堅州国」、「綿津見神宮」といった世界が登場する。それらが三重層の世界構造を作っているのか、あるいは二重層の世界構造であるという点で議論がされてきた。本論文において、他界訪問譚はシャーマンのイニシエーションと通じているという

指摘を受け、他界との「交渉」という視点から古事記の他界観の考察を試みたい。

キーワード 古事記、シャーマン、交渉手段、他界

はじめに

七一二年に成立したと伝わる古事記は日本の最古の書物である。古事記には物語が展開していくなかでいくつかの他界が登場する。それは冒頭に登場する「高天原」、イザナキがイザナミを追って行った「黄泉国」、オホアナムヂが兄弟から逃れようとしてたどりついた「根堅州国」、ホトリが兄・ホデリの釣針を探しに赴いた「綿津見神宮」である。¹⁾

この他界とはどのような性格を持っているのか、お互いにどのような

な関係にあるのかということについて様々な論が展開されてきた。西郷信綱氏は古事記は内的構造を有し、対立している要素の組み合わせによって成り立つという構造的な研究を行った。古事記の神話の世界はたがいに関連しあう天上、地上、地下という三つの領域、または次元から成るといい、天上は「高天原」であり、地上は「葦原中国」であり、地下世界は「黄泉国」、「根堅州国」、「綿津見神宮」である。こうした上中下三重層の神話的世界構造の基礎にあるのが村落生活における中心と周辺、すなわち人が住む地域と葦の茂る周辺地帯との対立であったと述べている。この生活構造が垂直化されたものが、神話

世界の三重層の構造にほかならないのであった。⁽²⁾

西郷氏の三重世界像を批判したのは神野志隆光氏である。神野志氏は古事記と日本書紀は異なるコスモロジーによって成り立っており、異なる書物であることを主張した。⁽³⁾ また、「葦原中国」に焦点をあて、「中国」の「中」とは中心であると指摘し、他の世界はこの「葦原中国」とどうかかわるかということに注目した。そこで、古事記の文章から「葦原中国」から「黄泉国」または「根堅州国」への移行は垂直的に語られることがないこと、これらの世界が地下にあるという表現がないことから、「黄泉国」と「根堅州国」は地下にあるのではなく、「葦原中国」と平面的につながると解釈している。

こうした解釈によると古事記の他界は固定化してしまうのである。だが、古事記の物語を見てみよう。「高天原」がどうやってできたのか語られず、もう既に存在しているかのように古事記の物語がはじまる。また、物語が展開していくなかでイザナキが行くことによって「黄泉国」が登場し、イザナキが「黄泉国」から帰るときに「葦原中国」が登場する。次に、オホアナムチが「根堅州国」へ行こうとしたときに「根堅州国」があらわれ、後にホヨリの行く世界として「綿津見神宮」が出現するのである。このようにそれぞれの主人公がその他界と「交渉」していくことによって他界が古事記の物語に登場するのである。

こうした他界訪問譚は他界の体験を経て成長していくというシャーマンのイニシエーションに通じている。⁽⁴⁾ 西郷氏は『古代人と夢』の中で他界をシャーマンの体験という視点からも解釈している。『古代人

と夢』において古事記の他界、「根堅州国」、「海神宮訪問譚」はシャーマンの幻想に基づくものであると述べている。本論文において西郷氏の指摘を踏まえて、シャーマニズム、シャーマンの体験という視点から古事記の他界観の考察を試みたい。

一、「黄泉国」

イザナミは火の神を生むことによって、女陰を焼かれ亡くなってしまう。そこでイザナキはその亡き妻に会いたいと思い、「黄泉国」へ追っていく。古事記の原文（読み下し文）は以下の通りである。

（イザナミが）次に火之夜芸速男神を生みき。亦の名は、火之迦毘古神と謂ひ、亦の名は、火之迦具土神と謂ふ。此の子を生みしに因りて、みほとを炙かえて病み臥して在り。（中略）故、伊邪那美命は火の神を生みしに因りて、遂に神避り坐しき。故爾くして、伊邪那岐命の詔はく、「愛しき我がなに妹の命や、子の一つ木に易らむと謂ふや」とのりたまひて、乃ち御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひ哭きし時に、御涙に成れる神は、香山の畝尾の木本に坐す、名は泣沢女神ぞ。故、其の、神避れる伊邪那美命は、出雲国と伯耆国との境の比婆之山に葬りき。（中略）是に、其の妹伊邪那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往きき。（古事記上巻）

ここで注目したいのは、「黄泉国」という他界が登場する場面である。イザナキとイザナミが国生みを行う場面において、「黄泉国」を作ったという話が見られない。イザナミが亡くなることは古事記の原文において「神避る」と表現され、この「神避る」とは「黄泉国へ行ったことをいう」という意味であると解されている。^⑤文脈の中から考えるとそうであるが、古事記にはイザナミが「黄泉国」へ行ったという記述が見られないのである。「是に、其の妹伊邪那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往きき」とあるように、イザナキがイザナミのいる場所へ赴こうと思つたときに、はじめて「黄泉国」という他界が古事記の物語に登場するといえる。

イザナキが「黄泉国」へ行こうと思つたその前に泣く場面がある。それで泣くという行為の意味についてみてみたい。イザナキの泣く姿は「御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひ哭きし時に」と表現されている。つまり、普通に涙を流してひそかに泣いているのではなく、激しい動作を伴い、泣いている様子がうかがえる。死者に対して泣く行為は動作と声を伴い、それは殯儀礼における匍匐・歌舞であり、蘇生させるための所作であることが指摘されている。^⑥また、イザナキの涙に成れる泣沢女神は葬儀にさいして泣く役をする泣女であるところから泣沢女となったという指摘がある。^⑦つまり泣くことは他界との「交渉手段」であることがうかがえる。イザナキが泣くという「交渉手段」を用い、交渉していくことではじめて「黄泉国」という他界が古事記の物語にあらわれたのである。

次に「黄泉国」と交渉するイザナキにはシャーマンと共通している

ところがあるかどうか黄泉国訪問の前の性格と帰還後の性格をみてみたい。

神田典城氏はイザナキは「黄泉国」からの帰還後、ミソギによって生じた三貴子を支配者に相応しい三界の統治者に当てていると述べ、それは「黄泉国」訪問の結果として行われたもので、それがなければ生じなかつた事態であると指摘している。^⑧その論をうけて梅田徹氏は「黄泉国」訪問以前と以後のイザナキの性格を比較し、以前はイザナキの尊称は「命」でほとんど一貫していたのだが、以後は「大神」、「大御神」となることを明らかにしている。^⑨梅田氏の提示した表を用してみた。^⑩

伊邪那岐神 (三十・三)	〔神世七代〕
伊邪那岐命 (三一・五)	〔国生み・神生み〕
伊邪那岐命 (三二・二)	〔国生み・神生み〕
伊邪那岐命 (三三・三)	〔国生み・神生み〕
伊邪那岐命 (三三・九)	〔国生み・神生み〕
伊邪那岐命 (三五・七)	〔国生み・神生み〕
伊邪那岐伊邪那美二神 (四一・一二)	〔国生み・神生み〕
伊邪那岐命 (四二・一)	〔イザナミの葬〕
伊邪那岐命 (四三・五)	〔カグツチの殺害〕
伊邪那岐命 (四五・七)	〔黄泉国訪問〕
伊邪那岐命 (四七・一)	〔黄泉国訪問〕
伊邪那岐命 (四七・三)	〔黄泉国訪問〕
伊邪那岐命 (四七・十二)	〔黄泉国訪問〕

伊邪那岐命 (四九・五)

〔黄泉国訪問〕

伊邪那岐大神 (四九・13)

〔ミソギ〕

伊邪那伎命 (五三・10)

〔三貴子の分知〕

伊邪那岐大御神 (五五・3)

〔スサノヲのカムヤラヒ〕

伊邪那岐大御 (五五・7)

〔スサノヲのカムヤラヒ〕

伊邪那岐大神 (五五・10)

〔鎮座〕

「黄泉国」訪問以前には「大神」の尊称は見られず、また、「黄泉国」帰還後に「大神」と呼ばれる点は日本書紀一書にも見られない古事記独自の点である。イザナキは以前とは異なる特別な「大神」の姿でミソギをして最後に三貴子を産み、またそれは「黄泉国」訪問という経験をくぐり抜けて果たされたのであることがわかる。

以上のことから、「黄泉国」の体験を通してイザナキの性格が変貌することがうかがえた。そのことを「シャーマニズム」という視点で考えると、イザナキの「黄泉国」訪問を通して成長していき、それはシャーマンのイニシエーションと共通していることが見れる。

さらに、イザナキの帰還後の性格の考察を進めていきたい。イザナキが「黄泉国」からの逃亡で桃の実で黄泉軍を退治してから、桃の実に向かう場面。

黄泉ひら坂の坂本に到りし時に、其の坂本にある桃子を三箇取りて待ち撃ちしかば、悉く坂を返りき。爾くして、伊邪那岐命、桃子に告らさく、「汝、吾を助けしが如く、葦原中国に所有る、うつしき青人草の、苦しき瀬に落ちて患へ惚む時に、助くべし」

と、告らし、名を賜ひて意富加牟豆美命と号けき。(古事記上巻)

また、三貴子の分治の場面。

此の時に、伊邪那伎命、大きに歎喜びて詔はく、「吾は、子を生み生みて、生みの終へに三はしらの貴き子を得たり」とのりたまひて、即ち其の御頸珠の玉の緒、もゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて、詔ひしく、「汝が命は、高天原を知らせ」と事依して賜ひき。(中略) 次に、月読命に詔ひしく、「汝が命は、夜の食国を知らせ」と、事依しき。次に、建速須佐之男命に詔ひしく、「汝が命は、海原を知らせ」と事依しき。(古事記上巻)

「黄泉国」訪問以前に出来損ない子のヒルコを生んだため、天神に相談し、天神に委任されていた。その命令に従っていた。だが、帰還後に自分がイザナミと作った国の「うつしき青人草」に対して責任感を持つて救いを与えたり、三貴子の分治において「汝が命は、高天原を知らせ」などと委任したりする。つまり、「葦原中国」に対する支配者的な行動をとるのである。イザナキはイザナキの「命」から、自ら命令を下すというイザナキの「大神」へ変貌し、「葦原中国」に対する支配者的な性格をも持つようになることがわかってくるのである。泣くことで他界と「交渉」を行い、他界の体験を通して変貌するというイザナキにはイニシエーションを受けるシャーマンというシャーマニズムのありかたとの共通点が見える。さらにイザナキが「交渉」

することではじめて「黄泉国」という他界が古事記の物語に登場するといえるのである。

次に、「葦原中国」という世界が現れる場面を見てみたい。それはイザナキが「黄泉国」からの逃亡で桃の実で黄泉軍を退治してから、桃の実に向かって「汝、吾を助けしが如く、葦原中国に所有る、うつしき青人草の、苦しき瀬に落ちて患へ惚む時に、助くべし」という場面である。

それ以前にイザナミとイザナキで生む島々は「葦原中国」という名で呼ばれていない。イザナキが「黄泉国」から返つてくるときに、はじめて「葦原中国」という世界が現れる。それはストーリーが展開していく中で「葦原中国」と「黄泉国」は相互に係づけられて出現するという意味であると指摘されている。¹¹ シャーマンという視点で見ると、イザナキが他界と交渉していくなかで「黄泉国」に対する「葦原中国」が出現すると言える。また、この「葦原中国」の出現はイザナキの支配的な性質を持つようになったことと通じていよう。

これに対して日本書紀ではイザナミが亡くなることがなく、黄泉国という他界が登場しない。イザナミとイザナキは日の神、月の神まで一緒に産む。日本書紀においてイザナミとイザナキが陰陽を体现する神として描かれ、両者が相和することによって世界が作られ、成り立っている。つまり、日本書紀は陰と陽の結合によって世界が作られ、それは中国の陰陽論に基づく世界像を描いているのである。¹²

二、「根堅州国」

次に「根堅州国」が登場する場面を具体的に見てみたい。「根堅州国」という呼称が古事記にはじめて出てくるのは三貴子の分治のくだりにおいてである。スサノヲが成人になつても泣くばかりで、なぜ泣くのかと聞かれると「妣が国の根堅州国」へ行きたいと言う場面である。

次に（イザナキが）、建速須左之男命に詔ひしく、「汝が命は、海原を知らせ」と、事依しき。故、各依し賜ひし命の随に知らし看せる中に、速須左之男命は、命せられし国を治めずして、八拳須心前に至るまで、啼きいさちき。其の泣く状は、青山を枯山の如く泣き枯し、河海は悉く泣き乾しき。是を以つて、悪しき神の音、狭蠅の如く皆満ち、万の物の妖、悉く発りき。故、伊邪那岐大御神、速須左之男命に詔ひしく、「何の由にか、汝が、事依さえし国を治めずして、哭きいさちる」とのりたまひき。爾くして、答えて白ししく、「僕は、妣が国の根堅州国に罷らむと欲ふが故に、哭く」とまをしき。（古事記上巻）

後にスサノオは乱暴を起こし、「高天原」から追放される。出雲に下り、ヤマタノヲロチを退治し、須賀の宮を造る。そこでその妻クシナダヒメと子供を生むが、その六世の子孫としてオホクニヌシが生まれる。

スサノヲの子孫、オホアナムヂは兄弟に追われ、殺されるが、「御祖の命」カムムスヒによつて蘇生する。だが、兄弟がまだ殺したいという気持ちでオホアナムヂを追っているので、カムムスヒがオホアナムヂを木国のオホヤビコのところに行かせる。さらに、オホヤビコがオホアナムヂを兄弟から救うために木の叉からくぐり抜けさせ逃して、スサノヲのいる「根堅州国」へ行かせる。古事記は以下のようになっている。

(カムムスヒがオホアナムヂを) 乃ち木国の大屋毘古神の御所に違へ遣りき。爾くして、八十神覚め追ひ臻りて、矢刺して乞ふ時に、木の俣より漏け逃がして云ひしく、「須佐能男命の坐せる根堅州国に参る向かふべし。必ず其の大神、議らむ」といひき。

(古事記上巻)

ここでオホヤビコの言葉のなかでオホアナムヂが行くべき世界として「根堅州国」が登場する。だが、スサノヲが「根堅州国」へ行つたという記述がないが、既にそこにいるかのようなのである。

それに対して、日本書紀はスサノヲが須賀の宮を作り、オホアナムヂを生み、根の国へ行つたことを明らかに示している。

乃ち相与に遵合して、児大己貴神を生みたまふ。因りて勅して曰はく、「吾が児の宮の首は。脚摩乳・手摩乳なり」とのたまふ。故、号を二神に賜ひて、稲田宮主神と曰ふ。已にして素戔鳴尊、

遂に根国に就めます。(日本書紀神代上〔第八段〕正文)

古事記においてこのような記述が見られず、スサノヲがもう既に「根堅州国」にいるかのように話が展開していくのである。

そして後にオホアナムヂは「根堅州国」へ赴き、試練を受けることになる。

オホヤビコという神がオホアナムヂが他界へと渡っていくことを手伝う¹³⁾。その発した言葉の中に「根堅州国」が登場し、その言葉を通してオホヤビコはオホアナムヂが行くべき世界への方向を示す。オホアナムヂが他界と交渉していくことでそれが出現するのである。

呼称としての「根堅州国」はスサノヲが行きたいところとして現れるが、神々が活躍し、物語が展開する舞台としての他界はオホアナムヂの木の叉からくぐり抜けて行くことよつて出現するのである。

オホアナムヂの性格についてみてみたい。西郷氏はオホアナムヂが何度か死に、何度か蘇り、また「根堅州国」において苦難をうけるといふ物語は即位式の意味合いを込めた成年式であり、オホアナムヂは「根堅州国」でスセリビメを初め生太刀、生弓矢を手に入れて地上の世界へもどり、大国主、つまり王に変身する。この物語を基礎づけているのがシャーマンの首長の即位式であるという¹⁴⁾。つまり、他界の体験を経て王になっていくというオホアナムヂの物語は古代における王になるという儀礼に通じているのである。

このようなことからオホアナムヂには他界を体験することによつて変身するというシャーマンのイニシエーションと共通するところが見

える。また、他界と交渉することではじめてその他界が古事記の物語に出現するのである。

では、日本書紀における「根国」についてはどうだろうか。「根国」が登場する場面を取り上げてみたい。スサノヲは生れて、泣くばかりだったので、イザナキが怒ってスサノヲを追放する。

故、其の父・母二神、素戔鳴尊に勅したまはく、「汝甚だ無道し。以ちて宇宙に君臨たるべからず。固当遠く根国に適れ」とのりたまひ、遂に遂ひたまふ。（日本書紀神代上〔第五段〕正文）

後にスサノヲはヤマタノヲロチを退治してから根国へ行く。

己にして素戔鳴尊、遂に根国に就めます。（日本書紀神代上〔第五段〕正文）

日本書紀における「根国」はスサノヲが追放され、後に鎮まるところとして登場する。だが、オホアナムヂが兄弟に追われて「根国」へ行き、その体験を通してレベルアップし、帰還後に「葦原中国」の王、つまりオホクニヌシになっていくという古事記にあるようなシャーマニック働きをする他界としての「根堅州国」が登場しないのである。日本書紀のオホアナムヂは天孫降臨の場においてもオホアナムヂと呼ばれつづける。日本書紀におけるオホアナムヂの話は他界の体験を通して王になるという意味合いを持たないのである。

このようなことから日本書紀は古事記が描くようなシャーマニックな働きをする他界としての「根国」を排除しているといえる。

三、「綿津見神宮」

オホアナムヂが「根堅州国」から戻り、国作りを完成させる。そこで天神が「葦原中国」を平定するためにタケミカヅチを派遣し、オホクニヌシが国を譲る。後に天孫ホノニギが降臨し、物語りの舞台は出雲から日向の高千穂に変わる。ホノニギが山神の子、コノハナノサクヤビメを娶り、ホ德里、ホスセリ、ホヲリを生む。「綿津見神宮」訪問の話はホ德里とホヲリが主人公である。

海幸のホ德里と山幸のホヲリがお互いに道具を変えるが、ホヲリがホ德里の釣り針を亡くし、他の釣り針を持っていてもホ德里がそれを受けず、「本の鉤」を求め続ける。そこでホヲリが海のそばに来て泣いていると

是に、其の弟、泣き患へて、海辺に居りし時に、塩椎神、来て、問ひて曰ひしく、「何ぞ、虚空津日高の泣き患ふる所由は」といひき。答へて言ひしく、「我、兄と鉤を易へて、其の鉤を失ひき。是に、其の鉤を乞ふが故に、多たの鉤を償へども、受けずして、云ひつらく、『猶其の本の鉤を得むと欲ふ』といひつ。故、泣き患ふるぞ」といひき。爾くして、塩椎神の云はく、「我、汝命の為に善き議を作さむ」といひて、即ち無間勝間の小船を造り、其

の船に載せて、教へて曰ひしく、「我其の船を押し流さば、差暫らく往け。味し御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往かば、魚鱗の如く造れる宮室、其綿津見神の宮ぞ。其の神の御門に到らば、傍の井上に湯津香木有らむ。故、其の木の上に坐さば、其の海の神の女、見て相議らむぞ」といひき。(古事記上巻)

とある。「黄泉国」と「根堅州国」と同じように古事記の中では「綿津見神宮」がどのようにできたのかという記述はない。ホヨリがそこへ赴こうと思った時に、シホツチが登場し、「乃ち其の道に乗りて往かば、魚鱗の如く造れる宮室、其綿津見神の宮ぞ。」という言葉を通して、ホヨリが行くべき世界としての「綿津見神宮」への方向を示す。つまり、ホヨリが他界と交渉することではじめて「綿津見神宮」という他界が古事記の物語に登場するのである。

また、ホヨリは「綿津見神宮」に行くが、「小船」に乗ってそこへ渡る。では、船はどのような意味をもっていたのだろうか。西村享氏によると古代生活における船は交通の用具とともに、霊的な存在としてとらえられていたという。古事記では「鳥之石楠船神」またの名を「天鳥船」という神名を伝えているように、船は鳥と同じく天空を飛翔するという性能を持っていると考えられていたのである。¹⁵⁾

また、西郷氏はホヨリが「無間勝間の小船」に乗って「綿津見神宮」に渡るとあるが、「無間勝間」というときの「マナシ」は目がなという意味で、眠っている間に海底の異郷へ達することを比喩的に表現している。眠りあるいは夢とはこの世と次元の違う異郷へ渡る通

路であると西郷氏は解釈している。¹⁶⁾

このようなことから船に乗っていくことは他界へと渡っていくことの意味している。船とは他界との一つの「交渉手段」であることがうかがえるのである。

次にホヨリの性格についてみてみたい。西郷氏は、ホヨリもワタツミノカミから呪具を授かり、その呪力で兄を屈服させるという話はオホアナムズの「根堅州国」訪問と同じ型に属することを指摘している。大地の生産力、豊饒を象徴する女性、タマヨリビメと結婚することによって王たる性格を身につけるのである。

このようなことからホヨリには他界を体験することによって変身するというシャーマンとの共通点が見える。また、他界と交渉することではじめてその他界が出現することがうかがえるのである。

では日本書紀における「海神宮」訪問譚はどうだろうか。古事記のそれとストーリーはほとんど同じである。弟ヒコホホデミと兄ホノスソリと弓矢と釣針を交換し、弟ヒコホホデミが釣針を失ってしまう。そこで新しい釣針を作って兄に与えても、兄のホノスソリがそれを受けずしてもとの釣針を求め続ける。ヒコホホデミが海辺に行き、泣き苦しんでいるときにシホツチがあらわれ、「海神宮」へ渡っていく。そこでトヨタマビメと結婚し、亡くした釣針を戻し、本国へ戻ってから兄を服従させる。

日本書紀は以下の通りである。

故、彦火火出見尊、憂苦しびますこと甚だ深く、海畔に行き吟

ひたまふ。時に塩土老翁に逢ふ。老翁問ひて曰さく、「何の故にか此に在しまして愁へたまへる」とまをす。対ふるに事の本来を以してしたまふ。老翁の曰さく、「復な憂へましそ。吾、汝の為に計らむ」とまをして、乃ち無目簀を作り、彦火火出見尊を簀の中に内れ、海に沈む。即ち自然に可怜小汀有り。是に簀を棄てて遊行す。忽に海神の宮に至りたまふ。その宮は、雉、整頓り、台宇玲瓏けり。門前に一の井有り。井上に一の湯津桂樹有り。枝葉扶疏し。時に彦火火出見尊、その樹下に就き、徙倚彷徨みたまふ。良久しくして一の美人有りて、(日本書紀神代下〔第十段〕正文)

古事記のほうでは「綿津見神宮」はシホツチの言葉のなかであられるが、日本書紀は違う。古事記ではホヲリが海辺に泣いているときにシホツチがあらわれてきて、「綿津見神宮」への行き方を教え、また、「綿津見神宮」を具体的に描写し、そこへ就いたらホヲリは桂木を見るところまで教えてくれたのである。ホヲリがその言葉に従って行くと「故、教の随に少し行くに、備さに其の言の如し」とある。この部分は「根堅州国」から逃げるオホアナムヂに対してササノヲは「其の、汝が持てる生太刀・生弓矢以て、汝が庶兄弟をば坂の御尾に追い伏せ、河の瀬に追い祓ひて、おれ、大國主神となり、」という場面と通じるところがある。斎藤英喜氏はこのササノヲの言葉について、「後の地の文の語りがほとんどササノヲの言葉の繰り返しであることを見れば、異界の神の〈言葉〉そのものに威力が込められていることがわかる」と述べている。シホツチはここにおいて「葦原中

国」と「綿津見神宮」の仲介役をつとめている性格であり、ホヲリの旅における守護霊のような役割りを果たしていると理解できる。ある世界から他の世界へと渡るといふホヲリにとってシホツチの言葉は呪力を込められた言葉であり、この言葉に支えられ、「綿津見神宮」へ渡ったといえるのである。

これに対して、日本書紀のほうではシホツチの言葉は「復な憂へましそ。吾、汝の為に計らむ」だけでとどまる。日本書紀における「海神宮」はシホツチの言葉の中であらわれるのではなく、地の文の中であらわれるのである。

古事記にはシホツチとホヲリの段にみるような言葉の呪力が見えるが、日本書紀にはそれが見えないのである。このことから、古事記と日本書紀が描く世界が異なることがうかがえる。

四、「根堅州国」と「綿津見神宮」

このようにオホアナムヂとホヲリの訪問譚は同じ構造を持っているが、異なる点も注目する必要がある。何が違うのかについて考察してみたい。

オホアナムヂはササノヲに系譜をたどる。ササノヲは出雲にくんだり、ヤタマノヲロチを退治し、須賀宮を作る、その第六代の子孫としてオホアナムヂが生まれる。オホアナムヂを巡る話は出雲を舞台とする。また、出雲から「根堅州国」へ逃れてしまうのである。「根堅州国」からの帰還後オホアナムヂは王、オホクニヌシになり、国作りを完成

させるが、後に天神の子孫に国を譲る。

一方ホヲリの話は天孫降臨が行われた後の話であり、その舞台は出雲とは違う。ホヲリの父に当たるホノニニギが降臨したのは日向の高千穂であり、ホノニニギとその子、ホデリ・ホヲリを巡る話は日向を舞台とする。ホヲリはそこから海神宮に到るのである。後は王たる資格を身につけて、地上の天皇につながっていくのである。

また、結婚相手についてだが、オホアナムヂが自分の先祖であるサノヲのいる他界へ行き、そこで自分の同族であるスセリビメと結婚する。それに対して、ホヲリは血縁関係のないワタツミノカミが主である他界へ行き、同族でもないトヨタマヒメと結婚するのである。

さらに、オホアナムヂは「根堅州国」からの帰還後に自分の兄弟の神々を追ひやる。

故、其の大刀・弓を持ちて、其の八十神を追ひ避りし時に、坂の御尾ごとに追ひ伏せ、河の瀬ごとに追ひ撥ひて、始めて国を作
りき。(古事記上巻)

それに対して、ホヲリは「綿津見神宮」帰還後に

是を以て備さに海の神の教へし言の如く、其の鉤を与へき。故、爾より以後は。稍く愈よ貧しくして、更に荒き心を起こして迫め来たり。攻めむとせし時には、塩盃珠を出でて溺れしめき。其愁へ請へば、塩乾珠を出だして救ひき。如此惚み苦しびしめし時

に、稽首きて白ししく、「僕は、今より以後、汝命の昼夜の守護人と為て仕へ奉らむ」とまをしき。故、今に至るまで其の溺れし時の種々の態絶えずして、仕へ奉るぞ。(古事記上巻)

とある。つまり、ホデリが守護人となり、ホヲリに仕えるようになる。さらに、ホデリは隼人の祖先であり、その溺れる姿は大嘗祭における隼人の歌舞とつながり、宮廷に対する隼人の服従のしるしである¹⁸⁾。つまり、兄弟を追ひ払うオホクニヌシに対して、ホヲリはホデリを服属させる立場である。これがホヲリが天皇の系譜につながる事とかわりがある。

以上のことから、出雲とかわりを持つ他界、オホアナムヂの先祖であるサノヲを主人とする「根堅州国」へホヲリはいけないことがうかがえる。天神の子孫で地上の天皇につながるホヲリは王たる性格を身につけるためには新しい他界を必要とし、それは「綿津見神宮」であることがいえるのである。

古事記に対して日本書紀の正文の神話をみてみたい。イザナキが「黄泉国」へ行く話がなく、オホアナムヂが兄弟に追われて「根国」へ行く話もない。オホアナムヂはオホクニヌシになることなく、天孫降臨の場においてもオホアナムヂと呼ばれる。つまり、日本書紀はオホアナムヂが他界の体験を通して、国づくりを完成させる王となることが語られていないのである。日本書紀に対して古事記はシャーマニックな他界を重視することがうかがえる。

だが、日本書紀は「海神宮」訪問譚を語っている。ここで「海神

宮」という他界を必要としたといえる。ホホデミがいかに天皇となれるか、王たる資格を身につけるかということを語るためであるといえる。

古事記の物語を見る限り、他界は複数あることがうかがえる。「黄泉国」、「根堅州国」は地下世界、死後世界と一般化してしまった他界ではなく、それぞれ異なる世界であり、異なる主を持ち、また、異なる神々がその他界へ行き、その他界の体験を通して変貌していくことが見えるのである。

おわりに

「黄泉国」、「根堅州国」、「綿津見神宮」という世界は地下にあるか、あるいは「葦原中国」と平面的につながるかという議論をはじめにおいて紹介した。西郷氏は「黄泉国」、「根堅州国」、「綿津見神宮」は地下世界であるという。なぜ地下世界として設定するのかというと、古代人生活様式を基盤にするからである。古代人の村落生活における生活構造が宗教的なレベルになると垂直化され、聖なる中心である「高天原」、俗なる周辺ある「葦原中国」、死者の国という三重層の神話的世界像になるといえる。¹⁹⁾

神野志氏は古事記を文学作品としてとらえ、その言葉や表現に注目し、解釈をしている。神野志氏は西郷氏の三重世界像を批判し、古事記の文章から「黄泉国」と「根堅州国」は地下にあるという表現がないこと、そこへの移行は垂直的に語られていないことから、「黄泉国」

と「根堅州国」は地下にあるのではなく、「葦原中国」と平面的につながるかと解釈している。²⁰⁾

それに対して本論文ではシャーマンの他界と交渉を行うという体験、シャーマンの世界という視点から見ると、古事記の他界は固定していないものであることが見えてくる。この視点から見れば、西郷氏が指摘するような古代人の生活を宗教的なレベルで表現した世界構造は成り立たなくなるといえる。

シャーマンが他界と「交渉」していくという点からみると、古事記は世界構造というものを設定しないのである。「高天原」がどうやってできたのか語られず、もう既に存在しているかのように古事記の物語がはじまる。またその物語が展開していくなかでシャーマンが他界と「交渉」することによって「黄泉国」、「根堅州国」、「綿津見神宮」という他界が出現し、さらに、イザナキが黄泉国から地上に戻るときに「葦原中国」という世界が登場する。他界はシャーマンが交渉することによって出現してくるのである。

他界が垂直的につながるか、平面的につながるという問題は世界構造を前提にするものである。世界構造とは世界がお互いにどの関係にあり、それがどのような構造、世界観をつくるのかというものであるといえる。だが、交渉手段という観点から見ると、世界がお互いにとの関係に位置するのが大事ではなく、シャーマンが他界と交渉することによってその他界は出現することが重要なのである。これが古事記の特徴である。

〔注〕

- (1) 古事記、日本書紀は本論文で頻繁に使うので、『』をつけない。また、神の名の表記は記紀において異なるため、カタカナで書くことにする。
- (2) 西郷信綱『古事記の世界』岩波書店 1967
- (3) 神野志隆光『古事記の世界観』吉川弘文館 1986 古事記と日本書紀におけるイザナキとイザナミの神話を取りあげ、それが大きく異なることに注目する。日本書紀においてイザナミとイザナキが陰陽を体現する神として描かれ、両者が相和することによって世界が作られ、成り立っている。日神、月神に至るまで、イザナキ・イザナミの相和することによって生じ、イザナミが死ぬことがなく、黄泉国へ行かない。それに対して、古事記では火の神を産んだイザナミは死に、これを追ってイザナキが黄泉国まで行くが、亡くなったイザナミの姿を見て逃げかえり、ミソギをして、天照大神とスサノヲを出現させるのである。このような要素の違いを踏まえて、記紀の世界が大きく異なり、日本書紀は陰と陽の結合によって世界が作られ、それは中国の陰陽論に相違ないと述べている。
- (4) 西郷信綱『古代人と夢』平凡社 1993
- (5) 西郷信綱『古事記注釈』第一巻 ちくま学芸文庫 2005
- (6) 山田永「泣くことの古代的な意義」『古事記スサノヲの研究』新典社 2001
- (7) 5、と同じ
- (8) 神田典城「古事記における異界」『古事記研究大系 4 古事記の神話』高科書店 1993
- (9) 梅田徹「イザナキの黄泉国訪問と「大神」への変異―『古事記』の神代―」『日本文学研究』帝塚山学院大学日本文学会 1995―2表を引用したが、(一)の中の漢数字は引用所在をあらわす頁を示し、アラブ数字は行を示す。ただし、梅田氏は西宮一民編『古事記 新訂版』をもとにし、本論文では神野志隆光校注の『古事記 新編日本古典文学全集』小学館 2004を参考に行っているため、頁と行
- (11) 西條勉『古事記と王家の系譜学』笠間書院 2005
- (12) 3、と同じ
- (13) M・エリアーデ『シャーマニズム 古代的エクスタシーの技術 上』ちくま学芸文庫 2004
- (14) 4、と同じ
- (15) 西村享「鳥のあそび考―古代鎮魂の一考察」『日本神話研究 3』学生社 1977
- (16) 西郷信綱『古事記注釈』第四巻 ちくま学芸文庫 2005
- (17) 斎藤英喜「勅語・誦習・撰録と『古事記』」『日本の文学』1987
- (18) 16、と同じ
- (19) 2、と同じ
- (20) 3、と同じ

〔使用文献〕

- 『古事記 新編日本古典文学全集』山口桂紀・神野志隆光 校注 小学館 2004
- 『日本書紀 新編日本古典文学全集』小島憲之・直木孝次郎・西宮一民 小学館 2004
- (アンダソヴァ・マラル 文学研究科仏教文化専攻博士後期課程)
(指導・斎藤 英喜 教授)
- 二〇〇八年九月三十日受理